

パーキンソン病の話: 「ふるえ」について

パーキンソン病では運動症状だけでなく、それ以外のいろいろな症状が出てきます。ただし全員がそうなるというわけではありません。表1にはパーキンソン病の基本症状を示してありますが、診断の考え方の基本は振戦（震え）、固縮（身体の固さ）、動作緩慢のうち2つ以上があればパーキンソン病の症状があると考えます。これに姿勢反射障害（バランスがとりにくい）を加えて4大症状といえます。しかし、このバランス障害は病気の初めから出てくることはありません。ある程度進行した時に出てくるものです。初期の場合には他の病気を考えるのが診断の基本です。

【表1】パーキンソン病の運動症状

通常みられる症状

- 振戦
 - 静止時
 - 姿勢時
- 筋固縮
- 無動症
- 姿勢反射障害

パーキンソン病の診断には3つのうち2つが必要

パーキンソン病患者の約6〜7割に震えの症状が見られます。ドパの治療が始まり、身体の固さがほぐれると震えが出てくることもあります。これは病気の悪化ではありません。外見上の震えはなくても身体の中に震えを感じる場合は「インナー・トレモール」（身

体の内部の振戦）と呼ばれる現象で、その後の目に見える震えの発現を示唆すると考えられます。

「振戦（震え）」だけで診断はできない

しばしば手足の「震え」だけでパーキンソン病と診断されて治療を受けている人がいます。しかし、症状が改善せず、診察すると他の症状は認めないことがあります。このような患者は以外と多く、「本態性振戦」あるいは高齢者では「老人性振戦」とも呼ばれます。患者の頻度としては高齢者ではパーキンソン病よりもはるかに多いと理解されていますが、日本での調査はありません。

検査で確実な診断

声が震えたり、頭が震えるのは本態性振戦と考えた方がよいでしょう。しかし、甲状腺ホルモンが多過ぎる場合や、薬の副作用で震えが出ることがあるので症状だけで診断することは誤診のもとです。症状を正しく評価して、行うべき検査を行うことが正しい診断となり、適切な治療が行えるようになります。最も確実な診断は、脳内のドパミントランスプターが保たれている場合は本態性振戦で、減少しているのはパーキンソン病です。これは現時点での最新の検査ですが検査料金は高価です。